

# Ryuji Moriyama

## Portfolio

脱ポストモダン宣言

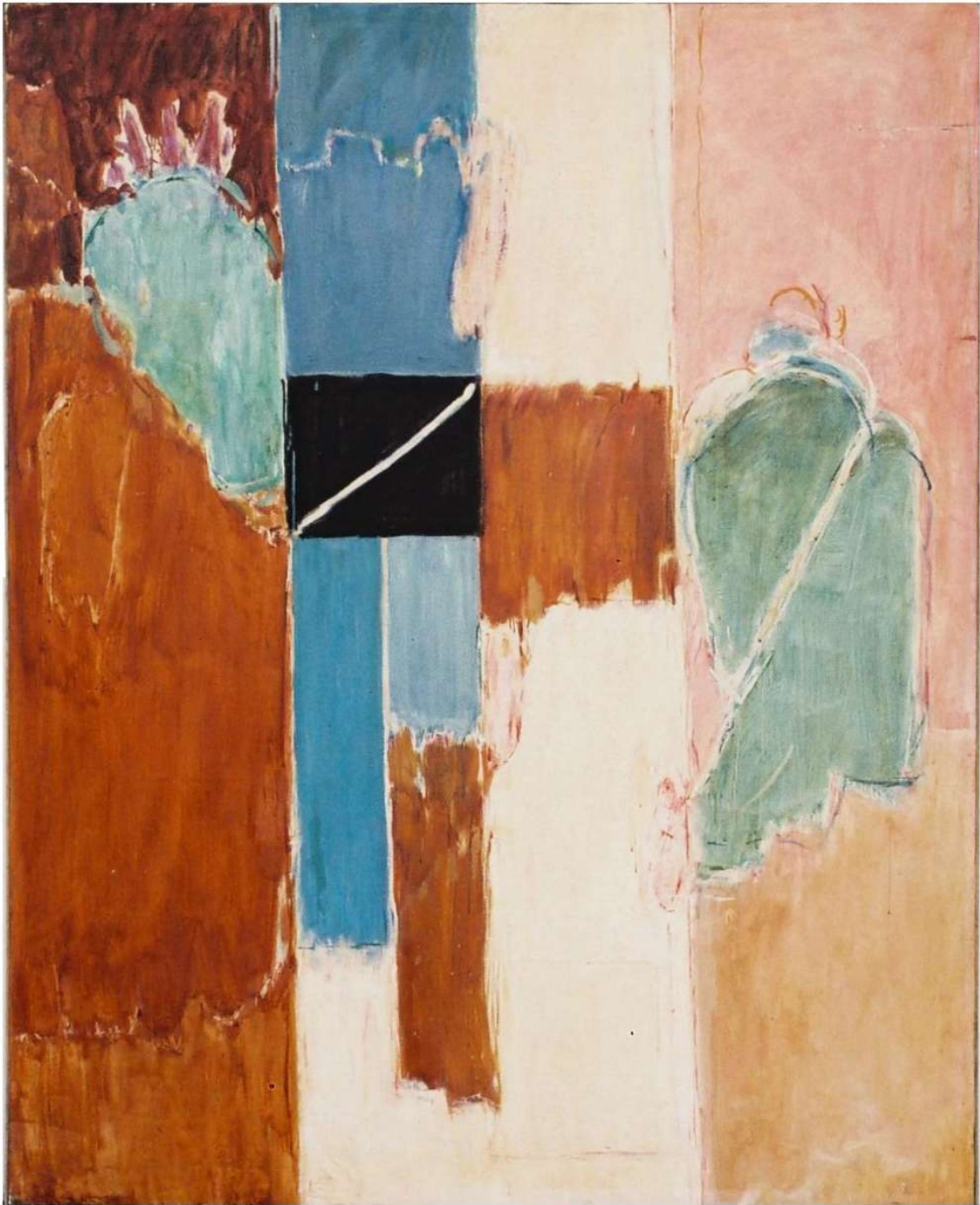
モダニズムは、絵画の自立を求め、その内側に閉じてしまった。

ポストモダニズムは、外側に根拠を求めて、感動を忘れた。

私は、絵画の自立性を保ちながら、そこに「意志」を融合させたい。

中心という装置によって、作品の「構造」と私の「意志」を融合させ、内と外を繋ぐ。

これが、私の「脱ポストモダニズム宣言」です。



1980 kuroisikaku(Black square) 164cm×130cm oil on canvas

私の芸術的探求の原点であり、「中心」というテーマが初めて現れた作品です。



1981 ドア 164cm×130cm キャンバスに油

このポートフォリオでは年代順に作品を並べています。

1981 ドア は 80 年代のアパートで壊れたドアを補修した2枚の板から発想を受けた作品です。この作品は私の絵画における「二つの四角」という重要なモチーフを決定づけた極めて初期の作品であり、探求の出発点です。





1987 Broken Book (壊れた本) 75cm x135.7cm アクリル・紙

1982年ごろからマティスの影響から紙にアクリルで着彩しそれを貼りつける作品を作り始めました。鮮やかな色彩で画面を関係付ける試み紙を着彩して貼ることは色彩の厳密な検証に役立ちました。これは紙を始めて5年ぐらいたってからの作品。ここでも中心の四角が浸食されながらも要になっています。



1991 Teien(庭園) 63cm×48cm アクリル 紙に着彩 切り紙

## 1991 Teien(庭園)

中心である赤い四角は視覚を色彩で引きつけ、下の群青の四角と階段状にくっついています。中心でありながら不均衡を作る要素の一部となっています。それは周辺を巻き込み影響を与え回収を求めます。この作品の中心は色彩的な焦点であると同時に周囲との色彩の関係性の構築、均衡と不均衡の調和という複数の役割をになっています。これらの相互作用を通し画面全体の解決に貢献しています。

つまりこの赤い四角は問題を提起すると同時に答えを与える役割を担っています。



1992 on the rock (石の上) 63cm × 46cm ミクストメディア

『中心』の探求における初期の試みである本作品は、「二つの中心」を主題に、四角のバリエーションで画面を構成した作品。偶然生まれた色彩の調子や筆致と、鋏やカッターで切られたシャープなエッジが共存する表現を試みました。重い色彩と形で鑑賞者と強く対峙する正面性を意識し、二つの中心が互いに影響しながら視線を誘導し、画面に複雑な構成と安定を生み出しています。普遍的な「中心」への多角的な探求を示す一作です。





1993 Suimen(水面) 75cm×56.8cm アクリル紙切り抜きボード

1993 Suimen(水面)

切り紙の二つの四角のシリーズ

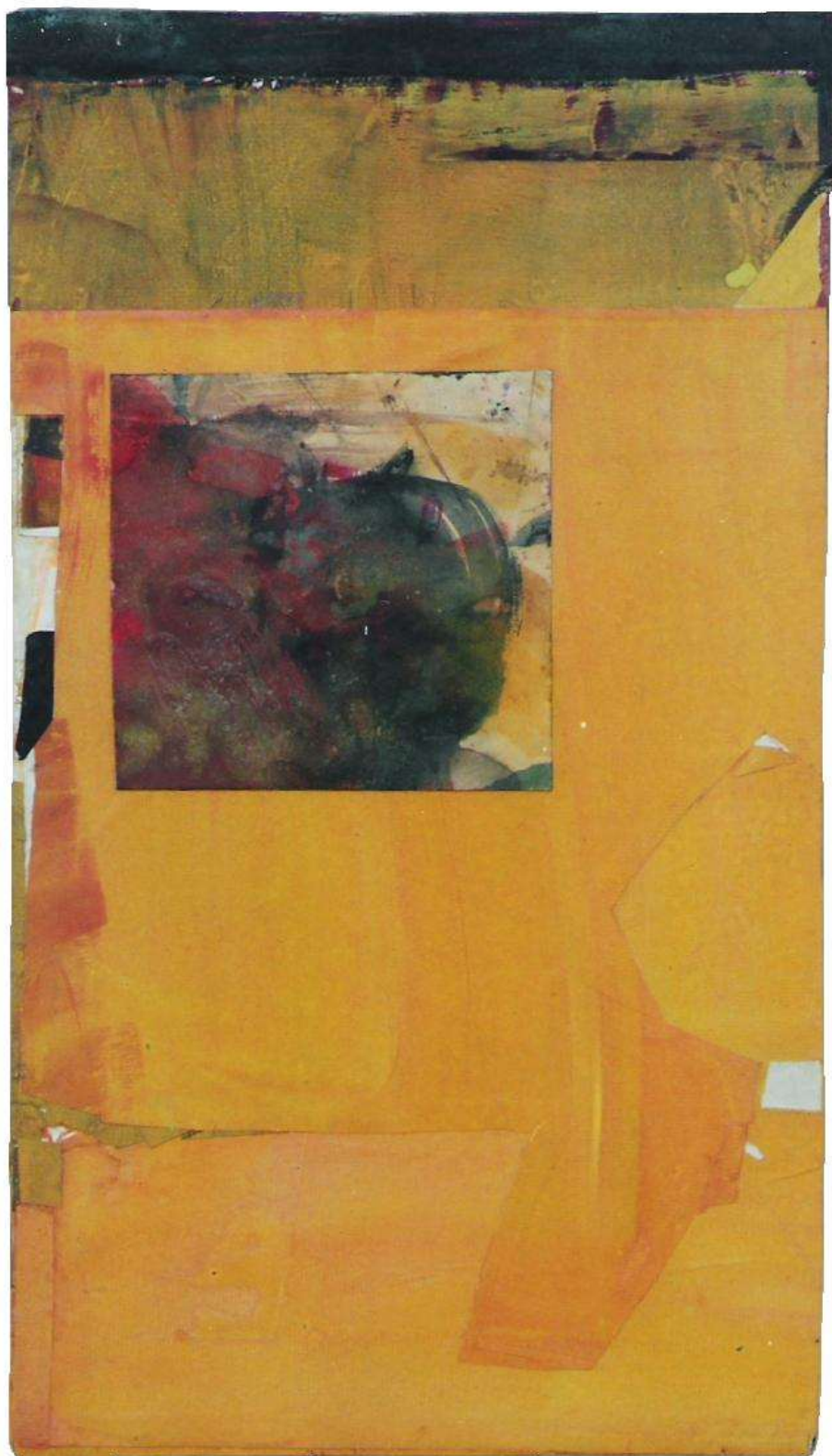
上の四角と下の四角は四角という形で正面性的には同等であるけれど  
上と下、周辺より暗く強いものと周辺より明るく浮遊していることで異なる性質  
を持っています。

ここで中心は単に画面の中央に配置されているだけでなく、  
画面の構成を決定づけ、画面内の要素を関係づけ、画面に奥行きや多様性を  
与えています。絵画における「静的な中心」から絵画全体の意味や構造を牽引  
する「動的中央」として主役となっています。



1994 Green Window (緑の窓) 75cm×56cm アクリル 紙切り抜き

画面を左右に分ける緑色の明度と彩度のわずかな差異が、空間の奥行きを生み出しています。中心に配置された黒に近い群青の四角は、この空間のずれをまとめ、画面全体の安定に貢献していると同時に、左に配置することで画面のバランスを調整し、さらに鑑賞者との視線の対峙をうみだしています。



1994 Mirror (鏡) 75cmx56cm アクリル紙 ボード



1994 Mirror (鏡)

この作品は均一に塗った黄色い画面と、偶然性の表れた四角い紙との出会いで成り立っています。色面は、黒から赤茶、黄色と変化し、明るい余白を残しているため、それ自体に奥行きがあるように感じられます。貼られた四角い紙は平坦な画面との対比で、動きを生み、画面に奥行きと変化をもたらします。そのため、この四角い紙は黄色い画面の上に貼り付けた1枚の紙であると同時にそこに奥行きのある窓の様な役割を演じています。

このように、中心である四角形は、意図と偶然性、平面性と奥行き、均一性と多様性、など絵画のいろいろな要素が会う重要な場となっています。



1996 **Green and Blue** 204cm × 116cm acrylic on canvase

## Green and Blue

二つの四角シリーズ、紙でできたことを絵具とキャンバスで出来ないかと思い挑戦した作品です。正面性を維持しながら浮遊する四角と画面がキャンバスに釘付けとなるように置かれた上の帯があります。

中心の四角は単なる形態ではなく画面の空間性や、視覚的探究を象徴する重要な役割を担っています。



2003 yb 156cm×91cm キャンバスにアクリル パネル



2003 yb 156cm×91cm キャンバスにアクリル パネル

二つの四角のバリエーションです。下の黒はシンプルだけど単調にならないための工夫。少なく限られた要素の中でオレンジの四角を中心としてまわりとの関係が単調で硬直しないように努めました。その過程で下の黒い凸型が生まれてきました。このようにオレンジの四角は視覚的中心(最も目を引く)構成の中心(画面全体の構成を決定付け、周りとの関係を作っている)変化の中心(画面に変化と動きを与える要素)と複数の役割を担う中心です



2007-8 無題 215 cm×150cm キャンバスにアクリル

以前の作品から少しずつ広がりを持たせ、大きな作品に挑戦した頃のもの。絵具のにじみや重なりを上帯で分割することで統一しようとしてきました。帯と下の要素の分断を避けるために角を丸くし、横に走るブラシも画面の統一を助けています。ここでも中心は複数の役割を担っています。色彩の偶発的な形と統一の意識の対立、焦点であり、統合を図る主役です。



2010 Haruka 33cmx21.5cm acrylic on canvas

この作品では色彩が持っているぼんやりした空間の中で中心としての四角ははっきりと視覚を引きつけるというよりは手掛かりとして存在しています。



2011 Tori no yume 18cmx14cm acrylic on paper、Sold (個人蔵)

#### 2011 Tori no yume

少しずつ生き生きとした表現を模索していた頃の作品です。画面分割された帯は、絵画の中の出来事と画面そのものへの注意を促し、純粋な彩度のある赤は、少し濁った下部の色との対比で色彩的豊かさを獲得するための試みです。

ここで中心は画面全体の反対色で周囲との緊張を与え同時に周りの自動筆記的な形と色彩の方向性を安定させています。安定と緊張を同時に体現しています。





2013 Suimen (水面) オレンジピンク 34cmx22cm キャンバスにアクリル

2013 Suimen orange-pink34cmx22cm キャンバスにアクリル

画面を長く見つめるうちに、四隅が丸みを帯びてきました。それは、中心的要素を持つ画面の全体性を強調しようとする視覚的欲求の表れです。フォービズムを思わせる色彩と筆致の中で、中心の赤い四角は周囲と調和し、輪郭を曖昧にしています。また、下の四角とわずかに異なる形を与えることで、画面の単調さを避けています。ここでの中心は視覚的焦点、色彩の調和、画面の全体性、単調さの回避と複数の役割を担っています。





2015 Gekkou 44cmx31.5cm acrylic on canvas

上部の黒い帯が画面を現実化させ、中心の四角形は描く行為の痕跡として、また光を帯びた象徴として現れます。青い三点と細い縦線は、その四角形の痕跡をさらに省略したものです。この作品における「中心」は、筆致によって制作過程そのものを作品に取り込む行為であり、絵画が持つ物質性と光の象徴を取り込もうとする意味の核となっています。それは、作り手の心の動きや思考、あるいは鑑賞者の心に問いかける性質を持つものです。



2018 Tani Watari アクリル、紙 8.5x21.0 Sold 個人蔵

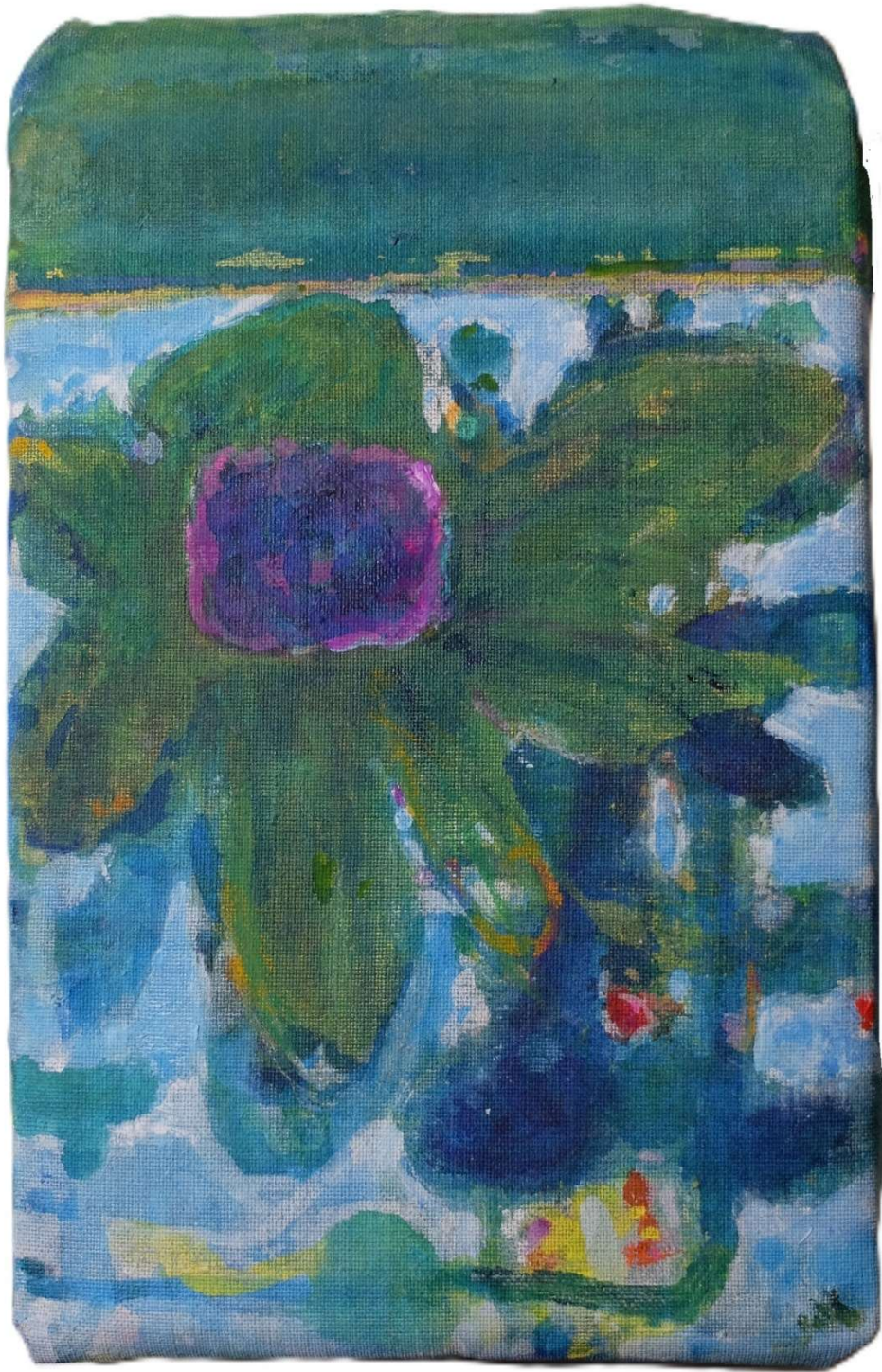
偶然にできた色彩の思いがけない色の重なりベールの中に中心としての褐色の四角を置いています。コントロールできない色彩のにじみや広がり寄り添うように。中心の褐色は視覚的焦点であると同時にコントロールできない偶然とコントロールしようとする意図を象徴しています。





2018 Hanakana アクリル、キャンバス 165.5cmx125.5cm

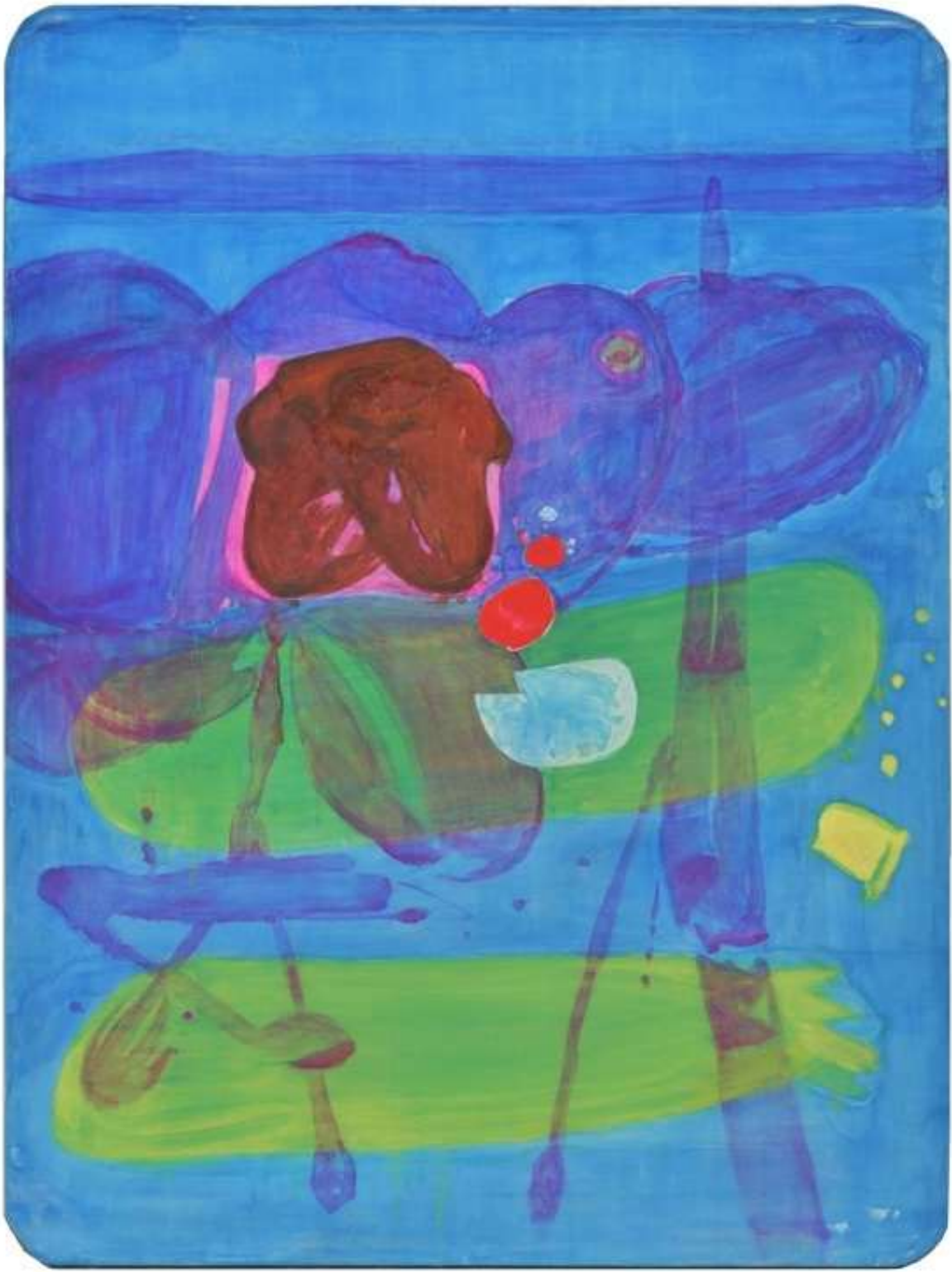
画面全体をピンクが覆っています。色彩の中心はピンクです。構図の中心は四角い褐色。それを囲むように有機的な赤が取り巻いています。ここではピンク、赤、茶色と色の明るさの段階通りに中心に向かい、また、逆の段階で画面に拡がってゆくように設計されています。この有機的な形は小さな作品から生まれた偶然的ではあるが呼吸するような形態を手掛かりに表現を追及しようと試みました。



2019 Soraki 34.0cmx21.5cm acrylic on canvas

中心を置くというフィルターを通してこの作品は学生時代に模写をしたポール・ゴーギャンのタヒチに行く前の風景を思い出しながらオマージュとして描いた作品です。





2019年 mikana .hakana 173.5x130.5cm アクリル、キャンバス

2019年 mikana.hakana

自動筆記的に表れた線からそれに肉付けされた形全体のブルーに対して、中心にはピンクとさらに茶色が色彩の役割を果たしながらも周囲の形に影響されています。上部の濃いブルーの帯は以前からの画面に合って画面そのものを強調する要素です。

黄緑はバイオレッドブルーと輪唱する。

ここでの中心は以前の作品に比べピンクの窓に茶色の奇妙な形がふさがって複合的になっているこれは中心の概念をより柔軟にとらえ画面に複雑さをもたらすと同時により豊かな表現を可能にする重要な役割を担っています。構図の中心であると同時に色彩の中心でもあります。あるいはブルーが色彩としての中心でしょうか？。





2019 Madoromi キャンバスにアクリル 23.0cmx11.0cm

綿布にしみ込んだ色彩の偶然が作り出す光のような効果とコントロールしようとする意思との間で素材との対話を定着できないかと思いながら。中心は色彩の関係性をつくりながらも、偶然とそれを統括しようとする意思との葛藤を象徴しています。



2023 Yume no shikisaihen(夢の色彩片) 10 cm x26.2 cm acrylic on canvas Sold  
個人蔵

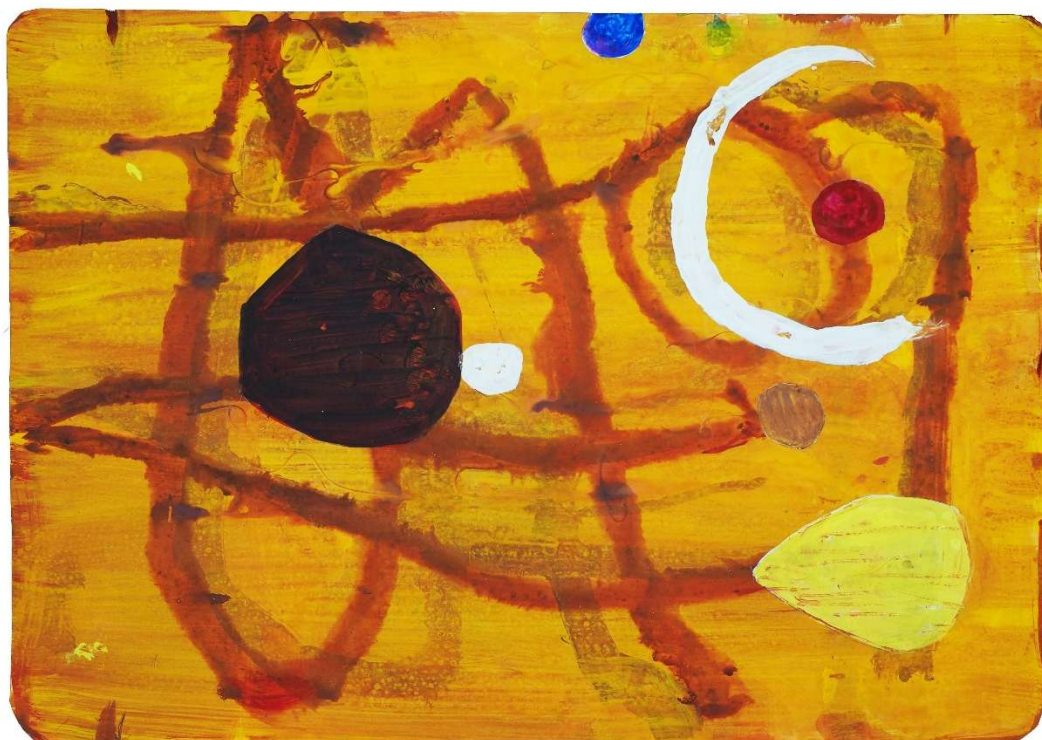
しみ込んだ色彩と中心の褐色の四角は重石として画面に安定を与えています。小さなブルー、グリーン、イエロー、レッド、余韻のピンク、の小さな色彩片はもう一方で色彩の中心として複合体のアーチを作っています。それはこの作品の色彩の豊かさ、複雑さに貢献しています。動きと安定、リズムと色彩の両立にチャレンジしています。ここでは色彩片である色彩が中心ともいえます。いわば「色彩の中心」という中心の意味を拡大した解釈がおこなわれています。安定感を左の中心。動きとリズム、色彩を右の中心に分担しているのかもしれませんが。



2024 kinomi korogaru 182 cm x144 cm acrylic on canvas

2019年の小さな作品を元に古典的な色彩で中心を取り巻く形が表れています。これは自動筆記的な試みから生まれた形です。しかし眼と手のコントロールと抑制によっている。偶然性と必然性、自由と制約といった対立する要素を統合しようとする、新たな試みです。





2024 Lines・Brown 37.5cm x 53.6 cm acrylic on paper

中心の黒い形は様々な線の中にあって鑑賞者の目を引き、安定をもたらしています。それによって見る人は落ち着いて画面にはいりこみ動き回ることができるでしょう。中心の形は完全な円でもありません。四角でも線と調和しないので、試行錯誤の末この様な曲線と直線の複合体の形になりました。線は偶然性の要因が強く、この作品の中心は偶然と必然、自由と制約の象徴になり、画面全体の構成と意味付けを牽引する力となっています。





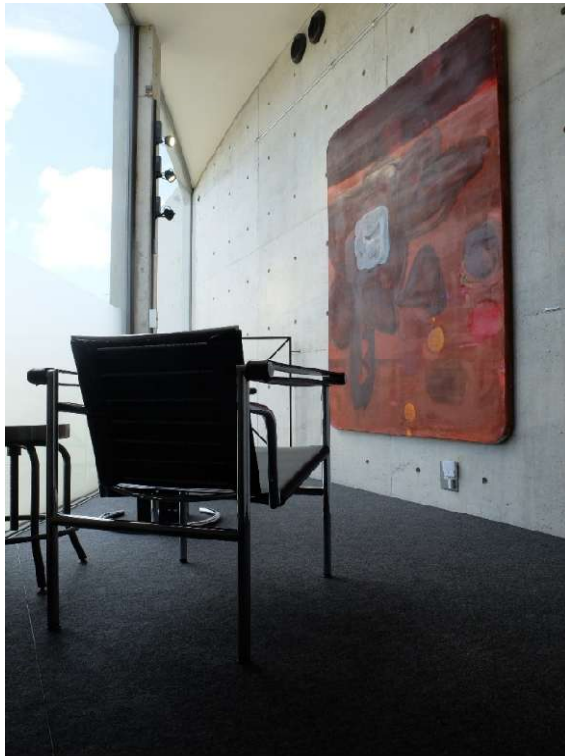
2024 Sen no naka (線の中) 26 cm x 38cm

いままで中心の周りにあった植物のような形の骨格としての線が表れています。自動筆記的な線ではあるけれどコントロールが効いています。線は描かれた線や引っかけた線によって描く行為が作品に取り込まれ、その色や形を追求することで絵画の本質を取り込もうとしている。ここで中心である黒い四角のような形は重しを置くという意識で置かれています。それらを安定させ、統合することで見る人に作品内を回遊してもらえます。焦点であり、構図の要素であり、統合の力である多層的なものです。



2024年 Session No.4 73.5x51.7 acrylic canvas panel

ここでの中心は黒い丸と四角の融合体とそれに拮抗するぐらいの強さで赤、オレンジ、リーフグリーンのしずく型が中心に集まるよう或いは囲むように集中しています。それらは切紙的な方法論をとりいれています。それらがまとまって複合体の中心になっているともいえるでしょう。ブルーの中の線はブルーという色のバリエーションを作りながら面に対する線として色片の塊を囲んでいます。黒い形とカラフルな色片の複合体は視覚を引き付け、画面全体の構成と意味を牽引する重要な要素となっています。



## 経歴

- 生年: 1957 年生まれ
- 学歴・初期活動:
  - 1980 年 創形美術学校 卒業（一席、卒業制作「黒い四角」で初めて「中心」が表れる。学校より個展費用を与えられる）
  - 1981 年 創形美術学校研究科 修了（この頃、二つの中心のある「door」を制作。みゆき画廊にて個展を開催。ブロックについての絵具三原色のシミから衝撃を受ける）
- 個展・受賞歴など:
  - 1991 年 なびす画廊にて個展開催
  - 1996 年 ホルベインスカラシッパ奨学生
  - 2000 年 第 1 回山本鼎版画大賞展 入選
  - 2000 年 島根県立美術館ギャラリーにて個展開催
  - 2009 年 はるひ絵画トリエンナーレ 入選
  - 2012 年 「現代抽象 13 の表現」展 出品
  - 2013 年 ギャラリー福山にて個展開催
  - 2014 年 ISE ニューヨーク・アートサーチ展 出品
  - 2015 年 ギャラリー福山にて個展開催
  - 2016 年 ニューヨーク アートエキスポ 出品
  - 2019 年 FACE 展 2019 入選
  - 2019 年 Gallery ジ・アース・鎌倉にて個展開催
  - 2020 年 FACE 展 2020 入選
  - 2024 年 Cloud9 ギャラリーにて個展開催
  - 2024 年 東京インターナショナルアートフェア 参加



## 「制度と作品」(作品への橋渡し)

### 現状と成り立ち

私は最近までポストモダンについてもどういふものか理解できずただ混乱し、不安に思っていました。しかしそれが中心を疑う、権威を疑うという事、それゆえ多様性を認め、大きな物語は終わったと言われたことが分かって来ました。それはデュシャンがプロペラを指さし絵画は終わったといったところから始まったのかもしれませんが。あるいはポロックがオールオーバーの絵画を発明したところかも知れません。モダニズムの絵画がジョン・マクラッケンの作品の様に物の様になって、さらに先を行く「もの」になってしまった。そしてコンセプチャルと、文脈によって作品を成り立たせる傾向が強まってきました。これが疑うことが正しいという制度になっているのだと思います。ここでいう制度とは美術界を取り巻く状況、リードする側という意味です。そこには美術館。ギャラリー、キュレーター、評論家、などが含まれます。ポストモダンとはモダニズムの反省から始まって権威を疑うという姿勢で様々な作品を容認してきました。しかしそれが制度になってしまうと「疑うことをしない作品は古臭いものだ」という排斥につながってしまいます。制度は制度を守ろうとしてそれ以外の可能性を切り捨てる傾向があるのではないのでしょうか。



## 私の立場

私が学生の頃は既に絵画は古臭いもの。まだ絵を描いているのかと言われる時代でした。ゴッホにあこがれて田舎から出てきたものにとっては全く混乱する状況でした。しかしモダニズムの絵画は私を魅了しとらえてしまいました。内側にはそのようなはっきりと感じることのできる絵画についての喜びがありながら外の世界では次々と展開される目まぐるしい美術の潮流の中で私は何とか自分と折り合いを付けながら自分の表現が確立できないかと模索を続けてきました。一枚一枚これこそと思うものを積み重ねていけば光も見えるのではないかと。とりあえず今のこの一枚に集中しようという気持ちで取り組んできました。その時中心になるものとその周辺との関係。中心となるものと違う要素との関係。或いは全体との関係を見ることによって、作品が読み取りやすくなるということに気がきました。既にオールオーバーの絵画が古典的と思われているときに。しかし、いくら時代がそうだから、はやっているからといっても自分にじっくりこないものを作ることはできませんでした。縋りつくような思いで中心を追求するより以外、私にはできませんでした。

はじめは霧の中を探るような、あるいはこれでいいのだろうかと疑うような中心に対するかわり方でしたが、ゆっくりくり返してゆくうちに自分の中でだんだん確信に変わってきました。中心を置くことによって構図的には制限されるけれど、むしろそれ以外のところは自由になっていくのではないかと。それは夙に糸があることによって高く飛べるように。そして美術の様々な成果をとり入れることができるのではないかと。これは安易な引用ではなく中心をフィルターにして様々な成果を取り入れることです。それは安易な引用とは違ふとはっきりとわかっていました。表面の形式だけ取り入れるならば説明するのも容易でしょうがそこに深さは無いと思います。私の引用は様々な成果を取り入れていますが取り入れることをアピールするためではなく、作品を深く豊かにするためのものです。それは言葉にしにくい質的な問題に関わっています。

## 中心を破棄した制度

現在ではポストモダンが美術界の制度となっています。

詰まり中心を追求することは全く受け入れがたいものになっているわけです。なんでも受け入れる多様性と言いながら中心を受け入れることだけは受け入れがたいのかもしれない。なぜならモダニズムが追及した純粹性、普遍性に中心を核とする權威を感じるからでしょう。しかし今やポストモダンが權威となってしまう。そしてそれを疑うことは許されなくなっている。疑うことを疑うとは信じることもかもしれません。私が中心を信じるのは固定された權威の為ではなく、だれもが持ちうる創造性を解釈するために、視覚的に非常に便利だからです。私は自分にとって心地よくないポストモダンも否定するのではなく、ある意味多様性という意味で取り入れていると思います。つまり否定も肯定もしない立場でいようと思います。しかし同じ制度がいつまでも続くものではないと歴史は証明しています。



森山龍爾 もりやまりゆうじ  
東京都立川市 在住

TEL 090-6128-8985  
[info@ryujimoriyama.art](mailto:info@ryujimoriyama.art)

<https://ryujimoriyama.art>



home page

<https://www.instagram.com/mori10yama/>

Instagram

